

# 転記分析

学生番号 1J19E058 加藤隆聖

2021 年 5 月 13 日

## 1 発話量

今回の実験では、二人の会話の発話量を分析した。特に被験者ごとの発話時間を分析する。被験者 MSTMKTNL の発話回数は 67 回であった。発話時間の平均時間は 1.20 秒であった。最小値は 0.22、第一四分位数は 0.59、中央値は 1.16、第三四分位数は 1.73、最大値は 2.83 であった。発話時間の分散は 0.54 であった。発話時間の標準偏差は 0.73 であった。ヒストグラムを以下に表示する。

被験者 MSTMKTNR の発話回数は 96 回であった。発話時間の平均時間は 1.20 秒であった。最小値は 0.21、第一四分位数は 0.90、中央値は 1.30、第三四分位数は 1.90、最大値は 5.98 であった。発話時間の平均時間は 1.49 秒であった。発話時間の分散は 0.81 であった。発話時間の標準偏差は 0.90 であった。ヒストグラムを以下に表示する。

二者の発話量の平均の差を検定するために、t 検定を行なった。t (161) = -2.25,  $p > .05$  という結果になった。p 値が有意水準 0.05 よりも小さかったため、帰無仮説を棄却し二者の発話量の平均値には有意な差があったといえる。エラーバー付き棒グラフは以下に表示する

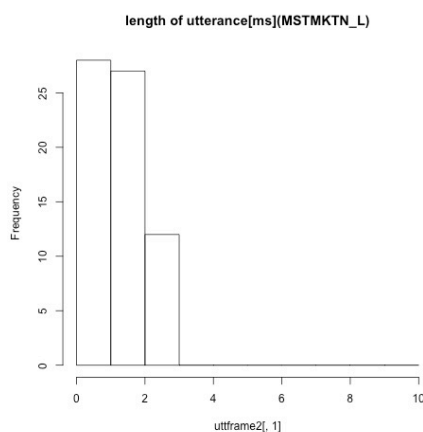


図1 ヒストグラム

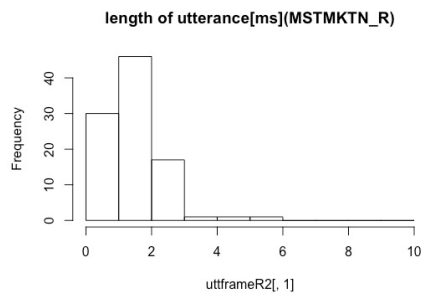


図 2 ヒストグラム

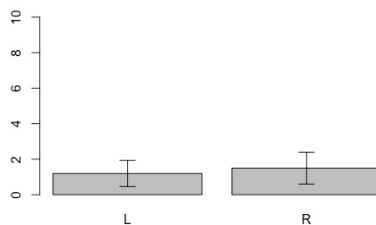


図 3 errorbar

## 2 考察

二者間の発話回数の差を見ると被験者 MSTMKTNR の発話回数が被験者 MSTMKTNL よりも 30 回多い。音声収録時間が限られているため、どちらか一方が多く話すことが起こりやすいのではないか。また、t 検定の結果から二者間の発話量の平均値には有意な差があったといえる。このこと発話回数の差を合わせて、二者間の対話ではどちらかの話者が話の主導権を握るために発話量が多くなったのではないか。

ヒストグラムから読み取れることは 0 秒から 2 秒の発話の回数が最も多いということである。そして、6 秒以上の発話はみられなかった。このように短い時間で一回の発話が終わることには、対話相手に話を理解させようとするために早口で矢継ぎ早に会話しないためと考えられる。また、対話相手の相槌も多かったため、相槌の影響も考えられる。